
“サイキョウ”は、誰？

さゆ&梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“サイキョウ”は、誰？

【Nコード】

N2897BA

【作者名】

さゆ&梨

【あらすじ】

今日も今日とて、世界は彼と彼女と彼を中心に回っている――
――だって、三人は選ばれし者だから。と

ある少年B「世界征服しちゃう？」とある少女U「だって、私たちの幸せの在処だもの」とある少年T「誰も、傷つけないで、傷ついて、欲しくないんだ……！」

……メイン連載であるリレーと同じくらいの長編になりそうだったものを自重したもの。メインの御三方に色々語ってもらって、あの人にオチつけてもらいました。

とある少年Bの本音（前書き）

梨です。今年もさゆともどもよろしく願いします

年明け一作目は予約投稿を使ってみようと思ってちまちま書いたの
で、一応完結したものを順々にやっていこうと思っています。

とある少年Bの本音

「正直、こんな世界嫌いだよ」

…そうか。

「何でこんな能力^{チカラ}与えたりしてくれたんだろうね？　ほんと忌々しい」

…顔がすげえゾ。

「アハハ」だって本音だしね、　そりや笑顔も崩れるってもんだよ」

……………

「でも一つだけ感謝してもいいかな。　あの二人と、会えたことくらいは。」

だって奇跡みたいだよな？　生まれた場所も、定められた運命も、形成された性格も、あらゆる環境が違うのに唯一つ、僕らには同じところがある。　同じ、能力^{チカラ}を持っている。これって凄いことじゃない？　っていうか凄いことだよ。こんな世界、他にはないもの。僕が言っただから、間違いないよ」

だろうな。

「二人と出会えたことで、僕は初めて自分っていう存在を確認できたんだ。　二人は、僕にとって神様みたいな人だよ」

あの二人が…神、か…

「だからあの二人に何かあったら、雑魚一匹だろうと幹部だろうと一国だろうと世界だろうと容赦はしないよ」

心狭えなオイ。途中からスケールでかくなりすぎだ、世界滅ぼす気か？ テメエらならできるんだからやんなよ

「さあそれはどうだろうね」 無いと思うけど、二人ともがそれを望むなら僕はするよ」

…まあ、二人ともが世界の滅亡なんかを望むことはないだろうな…

「僕らは君たちとはまた違った意味で“選ばれし者”だし、何より生まれた時から背負ってるんだし。世界滅亡させたからって何か得するわけでもないし、唯少し楽になるだけだし？ アハ、そう考えたら世界滅亡ってやつすい上に実が無いね」

値段がつけられるようなもんじゃねーだろ…

「どうかな？

人間にはオモイデ^{ヒト}ってモノがあるしね」 オモイデがあるってだけで捨てられないって人、たっくさんいるじゃん」

あ、そういう意味では世界は僕らのオモイデの上で重要な存在か

」 じゃあ簡単に滅亡させられないね」

滅亡させない、って選択肢はないのか…

「世界とやらがなんぼのもの、って感じだよな」僕にとっては二人以上に重要で大切な存在なんてないよ！」

ついに格下扱いか…

「今まで世界とやらが僕らに何をしてくれたっていうの？」

一、この世界に生み出した

一、こんな能力を与えた

一、酷い環境に生かした

一、二人と…うっん、彼と中々会わせてくれなかった

一、二人を苦しめる！

一、

途中から脱線してんぞ

「あれ、そうだったかな？ まあいいや」

あんな劣悪な環境で生きてきてさ、僕ってよく健康体に育ったよね」

性格は盛大に歪んだみてーだがな

「だって仕方ないじゃないか、僕らは『大空』なんだよ？

まあ『大空』の気持ちは『大空』にしかわからないだろうけどね！」

そらそーだ。わかつたらたまったもんじゃねえ。

「アハ、君の読心術なんてめじゃないもんね」

考えも感情も、体調も記憶も、あらゆる全てを読み取れる能力。
それが『大空』の『調和』だからね！

尤も、本来はそんなことのために使う能力じゃないんだけど、
でも世界とやらが生まれた時にすでに僕らに与える能力だから、
無意識にやっちゃうんだよねー」 だから僕は苦しめられたし、
今も苦しめられてるわけだけど」

苦しんでるようには見えねーがな

「半分は言葉の綾だね」僕は育ってきた環境上、ポーカーフェイスが身につきちゃってるからさ」

二人は苦しんでるよ？それなりに！特に片方がね！」

…アイツはな。アレは情けないっちゃ情けないが…

「アレは彼の長所だしね」別に直すことはないでしょ！」

…だな。

「全くさ！感情を高ぶらせるなって言ってるのに二人の前で大声で感情的に主張する馬鹿者はいりさ！むかついちゃったし二人も疲れてたし何より彼が仲間会いたそうな顔をしたから、今回の計画を立てただけどね」

それで三人で揃って出奔して日本で学生生活か。良い身分だな、マフィアとあるうもんが。

「いやだなあ、家出って言うてよ」

変わんねーっつーか寧ろ悪化してんじゃねーか

「でも、帰る場所はあるデシヨ？」

…あー、ああ、そうか…

「まあ彼女は『貴方たち二人のいるところが、私の帰る場所だから』
って言うてくれたけどね」

…ファミリーの奴らが男泣きすんぞ…

「あと、そこが『^{シアワセ}幸福の在処だから』、だってサ、僕もそう思っ
てるけどね！」

三人でいれば、^{シアワセ}幸福だと？

「そうだよ、寧ろ三人でいなければ^{シアワセ}幸福になんてなれないんだ！

だって僕らは『^{シアワセ}大空』だからね」

どんなに望まなくなつて、嫌がつてたつて、無意識に感じ取つて
しまう。

周囲の人々が自分たちに抱く畏怖、羨望、不安、野心、恐怖、焦
燥、思惑、不満なんかをね！

感じ取つてしまえば僕らだって人間だもの！ 傷つきもするし苛
立ちだって感じるし、何より脅威に感じるよ？

大切な人が傷つけられるかもしれない、
利用しようと多くの人が押し寄せてくるかもしれない、
この能力を研究しようとしてくる人がいるかもしれない、
思い通りにしようと画策しようとするかもしれない… あげたら
きりがないけどね！

何でそう思うか？ だってそういう考えすらも読み取ってしまう
んだ！そこに実行するか否かの意志があるかないかすらもね！

だから僕らは恐怖する。 自分自身に。

だから僕らは三人でいようとする。 だって三人でいれば恐怖を
感じない！

僕らは互いの考えが読める。 読めることを知っている。 読まれ
ても読み返せるから恐ろしくない。 僕らは唯一三人だけの、“対
等”な存在なんだ！

正直僕は、他の二人も僕みたいに捻くれた性格だったらしよ
うと思ってたんだ。

でもそうじゃないと知ったとき、どれほど嬉しかったことか！

…生まれて初めて泣き崩れたんだっただか？

「お恥ずかしながらね」

だから正直…、今回のことは、許せないんだけど、ネエ…？」

…あの襲撃か。

「ホントさア…？ ちょっと真剣にタイムパラドックス起こした
くなったよ」 具体的には過去に戻って生まれたばかりの命を、と

かね」

そいつはお前の能力^{チカラ}じゃ無理だろ…

「そりゃ本来の僕の能力^{チカラ}なら平行世界の虫螻共^{ムシケラドモ}を全て消滅させることくらいしかできないけど」

…それで充分だろーが

「まつさか！ 彼と彼女と、あと僕と、『大空』である世界の中核^{コア}に手を出そうなんて馬鹿なことを考えたんだよ！？ 社会的生物的
精神的肉体的あらゆる面においてその存在を許されることがあつて
はならないよ！」

何か同じものを二回言つてた気がすんだが…気のせいかな

「投獄だけなんて足りないさ、生きること死ぬことも許されない、
かといってあらゆる痛みをもつて罰則を与えても足りないよ！！」

人の話聞いちゃいねえ。 まあ元々会話なんてあるようでないが
な。

「ま、実はこの辺はもう話についてサ、 彼には内緒でちよつと
やっっちゃおうかって話になつてね」

…まあ、一応聞こうか。 誰とだ

「え、勿論僕らのお姫様に決まつてるじゃないか」

知つちやあいたが、あの子も随分とはつちやけたな…

「アレは天然でしょ？ いや、僕も彼もみんな“ひっくるめたら天然だ”って誰か言ってたけどね」

ああ、確かに。色々方向性が違うが…

「で、さ。リボーンくん？ 手、貸してくれるよね？」

…何にだ。

「決まってるじゃないか！」

—— 僕らの、世界征服計画にだよ。

「…（はあ）…」

大きく、大きく溜め息をつく。 どこで何を間違ったのかと、己に問いながら。

（いや、俺は何も悪くねえ。 … 敢えて言うなら、余計なことをしやがったあのファミリーが…）

起こしてはならぬ獣を、目覚めさせてしまったと言えよう。

生まれた時からその能力を^{チカラ}発揮し、およそ子どもらしくない子どもとして育つことで有名な、『大空』。

中でもトウリニセツテの大空属性である“選ばれし者”たちは、その特性が飛びぬけて強く、苦しまないではいられない人生を送る。

彼は、そういう意味では被害者だ。

今代の『大空』の中では、最も劣悪な環境で過ごし、最も苦痛を抱えて生きてきた人物だから。

（… 取り敢えずは、行くか…）

何をどうしたのかは知らないが、先程までテレビ画面に映ってい

た男の顔を脳内から振り払い、彼の家庭教師ヒットマンは、身支度を始めた。

未来に彼自身すらも称するようになる、彼の最高傑作（とその友人と部下）がいる、極東の島国へ、再び飛び立つために。

とある少女Uの述懐

「あのひとは神の使いか何かだとたまに思っんです」

いきなりかオイ。

「いくら環境が違うとはいえ、『大空』にあつてあそこまで純粹に育つたあのひとは、正直、わかつていても納得できないんですよ……」

まあ残る『大空』であるお前ら二人を見てると、確かにそう思わざるを得んがな……

「ほんと、おじさまズルイです！ あのひとにわたしたちの中で一番最初に会ったのはおじさまなんですもの！」

…それは、俺に言われてもな……

「でもおじさまが行ってくれたおかげで、今がある、というのもあるんですけど……」

だつて仮に他の人が行っていたら、あのひとはわたしたちのところへ、…まず、イタリアに来てくださらなかった気がしますもの。おじさまだからこそ、あのひとをイタリアへ来させることができましたんだと思いますわ。そういう意味では感謝しています」

…“そういう意味では”、な……

「だって、『大空』の残る一人である彼は、その劣悪な環境からあそこまで性格が歪んでしまったんですよ？ 初めて会ったときの、彼の纏うあの感情と過去と考え！ 思いだしたら今でも武者震いします…」

何か間違ってるだろ、それは…

「お互いの考えが読めちゃうものですから、不本意ながら意気投合してしまいましたけれど。 そういえば、あの会談が終わったあと、いきなり周囲の反応が変わったんですね。 おもに彼とわたしとの関係を疑うような感じで。 何故でしょう？」

そりや今まで父親代わりにおいてた周囲のオトコどもに一切目を向けなかったお前が、初めて（傍目から見れば）同年代の男と談笑したからだ

「え？ そうなんですか？」

ああ。 ジッリヨネ口でそんな話が飛び交っていると、コロネ口やら風やらスカルやらから何でか俺んとこに連絡が来たからな、よく知ってる

「何でそこで素直にわたしに聞かないんでしょう？ あとで連絡して、抹消して貰わなきゃ…」

…

「大体、周囲の男共、と言ったって、こちらとしては考えが読めちゃうんですよ？ 素直に甘えたりできるわけじゃないじゃないですか。 そりゃあのひとはしてたみたいですけど、それはお母様が特別だ

「だから…」

まーな。お前だってアリアが生きてたらそこまで中途半端な歪み方はしなかっただろーな

「え？」

アリアはお前たちと同じ『大空』だからな

「ああ…そうですね。幼いころは、何だか温かいものに包まれて、シアワセだったような記憶があります」

…すまん。俺が悪かった

「いえ、おじさまは悪くないです。あのひとのお母様は、ごく普通の方なのに、あのひとを受け入れられたんですよ…凄いです。」

チカラ
能力の持ち主であるわたし自身でさえ、自分の能力に恐れを
チカラ
抱き疲れ、涙し嘆き呪い、苛立ち怯えて震えるというのに…」

ママンか。まあ母親は偉大ってことだな。

「そう、ですね。」

…ところで、さっきから気になってたんだが何してる？

「見ての通り、弓を引く練習ですよ？」

イリデッセンテ・ダルド
…“無双攻撃”、か…？

「はい。みんなの力を借りますから、さほど鍛える必要はないのですけれど、しないよりは良いかと思ひまして」

ソレ、どこから借りてきた…？

「弓道部から、彼が借りてきてくれました。にしても大きいですね、わたしの力ではとても弦を張れないんですが…」

やるな。やらなくていい。

「でも、せつかく…」

しなくても以前は引けたんだろう？　ならするな。危なっかしくて見てられねー。怪我するゾ？

「うう…わかりました…」

まったく…今まで武器なんざ見向きもしなかったのに、一体どういう心境の変化だ？

「あのひとが…」

…アイツが、どうした

「学校に襲撃があつてから、ずっと浮かない顔なんです。誰も、傷ついて欲しくない、嫌な思いなんてさせたくない…、わたしたちの考えすら届かないほど、そればかり考えているんです」

…そうか…

「だからこそ、彼と結託する気になったのですけど。決定的だったのは隣で復讐計画を考えているのに気がつくこともなく、また口に出してもあのひとが目覚めることがなかったこと、ですね」

寝てる横でんな計画立ててたのか…

「いつもなら考えてる時点であのひとは目覚めるんですが…。わたしたちが有言実行ってことは、よく知っていますし」

…ちよつとマテ、考える？考えを読み合ってたのか？

「？おじさまだってよく読心術で会話なさってるじゃないですか」

ああ…いや、そうだが、な。それで気付くのか…？

「ええ、気付きますよ。わたしたちなんかは寝てるときはもう慣れているので、意識せずとも読む必要があるかないかを寄り分けられるんですが、あのひとはずっとそういうことをしてこなかったもので、寝ているときは無意識に色々読んでしまっんです。そういうときって結果的に夢とか、あるいは精神世界なんかに影響が出るので飛び起きちゃうんですよね。わたしも幼いころは経験があります。」

まあつまりは、あのひとはすぐ近くで暗殺計画など立てたら飛び起きるってことですね」

…そうか。

「自分だって絶対防御を使って疲れているはずなのに、わたしたちの心配までして。」

ヒヴァルヴェ・プロテツィオーネ

…あのひとが、一番大変なはずです。イルデッセンテ・タルド 無双攻撃はおしゃぶりを
通して力を集められるし、マリッタイム・ヴィズイビリタ 総合視野は力を集める必要すらないのに、
ビジュアルウェ・プロテツツイオーネ 絶対防御だけはその場に仲間が全員いて、そうしてその場で力を集
めなければいけない。それがどれほど苦痛で、辛いものか…!!」

そうだな…

「その上、他の『大空』にだってその苦しみは代替わりできないな
んて…っ ああ世界なんて忌々しい!」

…お前もか。

「え？何かおっしゃいましたかおじさま？」

いや…。

「それにしても、おじさま、よく来てくださいましたね？ 彼が連
絡を取るといったときは正直来てくださらないと思っていたのです
けど」

…今回のことは、俺もそれなりに思うところがあったな。何より
九代目から指示があった

「さすがは九代目様!」

陰ながらボンゴレは全力で支援するそうだ。

「それは良かったですわ。 もしあのひとを見捨てるようなファミ
リーならさっさと潰してしまわなければいけないところでしたし!」

……このきわどい発言はもはや血だな…

「では、あの虫虻共ムシケラドモの駆除完了が計画のスタートの合図です。よく覚えていてくださいませ、おじさま」

……………ああ…

「不謹慎ですけど、また見れるんですね。

ビヴァルヴェ・プロテツィオーネ
絶対防御が…」

ンなうつとりするようなモンなのか？

「ええ、とても綺麗なんです！ オパールのように七色に輝く薄い膜が、まあるく覆っている感じ、ですね。とてもキラキラしていて…」

ああ、いい。本番で見る。取り敢えずとても感動するのはよくわかった。

「ええ、それはもう！」

だが、ジッリヨネロの奴らは「無双攻撃イリデッセンテ・ダルドの美しさは言葉で語れない」、と言っていたぞ？

「それは…。七色に輝く弓につがえるのは虹の軌跡を残す矢ですから、美しいと言えば確かにそうなのかもしれませんけど…」

慣れるとそうでもない、か？

「はい。わたしは使い手ですから、幾らでも何度でも見れますし。
マリッティモ・ヴィズイビリタ
総合視野は何というか、能力としては素晴らしいんですが、その、
チカラ

…地味ですし…」

それは聞いたな。 奴自体が虹色に輝く物体になるんだっただか？

「はい。 マリッティモ・ヴィズイビリタ 総合視野が一番見れる頻度が高いと思いますよ？彼は能 チ力を使うことに躊躇いが無いので」

そうか。 まあそれなりに楽しみにしておく

「賢明ですわ。 ああ、おじさま、今回は許して差し上げますが、この部屋は基本的わたしたち三人のためのものなので、勝手に入って来ると痛い目を見ますよ？」

…心得ておく。

(…何だかな。)

相手はアルコバレーノのボス、ということのを抜きにしても、逆らえない空気を纏う少女。

対面していたのは、某中学の一室だ。何でも某風紀委員長殿と交渉して手に入れた、三人のためだけの部屋らしい。守護者たちすらそうそう入れてもらえないのだとか。

中は普通だった。…いや、普通すぎた。だって教室の一つのはずなのに、どこかの家の一室のようになっているのだ。超寛ぎ空間。

「…っつーか、トゥリニセツテの『大空』の奥義、使うのに躊躇いがないんだなアイツら…」

ぶつぶつ言いつつ歩みを進める彼は、どう見ても不審者である。だが彼にも彼なりに思うところがあった。

“トゥリニセツテの『大空』の奥義”とは、意味はそのままだ。先程の会話に出ていた、アルコバレーノの『無双攻撃』、マールマリッティモ・ヴィズイビリタの『総合視野』、ボンゴレの『絶対防御』の三つのことだが、それぞれピエアルヴェ・プロテツツイオーネの日本名が示す通り、三つを組み合わせるとんでもないことになる技である。

どんな装甲をも射通し破壊し尽くす、使い手の意思に応じて変化する無差別広域攻撃、イリデッシュエンテ・ダルド無双攻撃。

あらゆる物事を様々な視点から見通し、また知略と策謀の限りを尽くせる、マリッティモ・ウイズイヒリタ総合視野。

いかような襲撃・進攻は勿論のこと、針一本ですら傷つけることはできない特別な守護、ヒヴアルヴエ・プロテツツイオーネ絶対防衛。

戦において、大切な三要素がそのまま奥義となっている。例えなら剣、知恵、盾と言ったところか。

頭に“トゥリニセツテの”とつくだけあって、トゥリニセツテの持ち主しか扱えない代物である。使うために必要なのは、炎。アルコバレーノは“呪い”のおかげでおしゃぶりを通じて強く深い繋がりがあり、おしゃぶりを通じて炎を『大空』に渡すことができる。マールはアルコバレーノのような繋がりは無いが、そもそもが横の時間軸に関する力を持つため、そこから炎を得られる。

…ただ、ボンゴレだけは。先程彼女が言っていた通り、その都度炎を集める必要があった。——そしてそれは、酷く大変なことだった。いくら『大空』が“調和”することに慣れているとはいえ、元々他人の力だったものを吸収するのだ、それも六人分。その過程で、慣れない者は元の持ち主の思考なども拾ってしまうことがあるという。仮にその思考が不愉快なものであれば、“調和”に失敗することもあるのだとか。…まあ当然だろう。

誰だって不愉快な思いなどしたくないものだ。その思いが、助けようと大事にしようとしている者から向けられる謂れのない悪意なら、心を乱してもおかしくない。

過去にそんなボンゴレの『大空』が多くいたのだと、少女の前のアルコバレーノの『大空』が語っていたことを何となしに思いだしつつ、彼は今代のボンゴレの『大空』、自分の教え子のことを考え

るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2897ba/>

“サイキョウ”は、誰？

2012年1月10日12時45分発行